

指標名: バースレビュー実施率

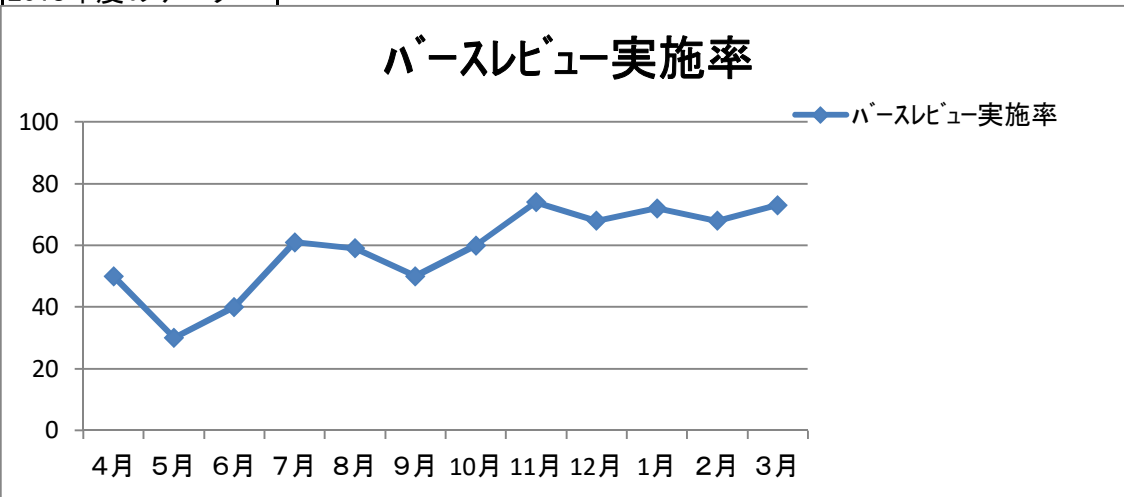
背景

MFICUは予期せぬ緊急手術や、陣痛抑制不可などにより気持ちの整理がつかぬまま分娩に至り、かつ早産となったことで出生児がNICUIに入院が必要となることが多い。その経過で分娩に対してマイナスイメージを持ちやすく、児に対して自責の念を持ちやすい。そのため、分娩に関わった助産師と分娩の振り返りを行う事で自分が頑張ることができたプラスの面にも気付くことができ、分娩に対するマイナスイメージをプラスイメージに切り替えることができると考えられる。さらに、分娩についてプラスイメージを持つということは、分娩を乗り越えた自分に自信を持つことにつながる。その自信は、分娩後に始まる育児を前向きに行っていくことに繋がる。また、そのような思いをNICUIに情報提供し継続した看護につなげることが出来る。さらにバースレビューから産婦の出産時のわだかまりを読み取ることができ、これらの産婦の思いを助産師が把握し、日々意識して産婦と関わることは、今後の助産ケアの充実につながると考える。産婦は辛かった出産体験を肯定的に捉えなおす機会を得て、それが育児へのプラスの動機付けという意味で産婦にとって有効である。

データの定義

対象(分母): MFICUで分娩した褥婦数  
(死産分娩を除く)  
定義分子: バースレビューを実施した褥婦数

2018年度のデータ



MFICU	Nursig Indicator (看護指標)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	バースレビュー実施率	50	30	40	61	59	50	60	74	68	72	68	73
	分母: MFICUで分娩した褥婦数 (死産分娩を除く)	16	26	20	31	32	32	28	27	35	29	32	19
	分子: バースレビューを実施した褥婦数	8	8	8	19	19	16	17	20	24	21	22	14

参考データ

2017年度バースレビュー実施率 平均64%

## 評価

2018年度のバースレビュー実施率の平均は57%であった。実施したことはスタッフへバースレビュー必要性を説明し、経腔分娩の直接介助者、帝王切開術時のベビーキャッチをしたスタッフへバースレビューの実施の呼びかけを行った。また、記載方法としてバースレビューのテンプレートを使用するように呼びかけし、対象スタッフへデータ記入用紙を記載するように呼びかけを行った。

バースレビュー実施率が低い要因としてはMFICUとC5病棟の転入・転棟することでバースレビューを実施するスタッフの責任が曖昧になっていおり実施していないことがあった。また、分娩介助者がバースレビューを実施することになっているが、MFICUと産科病棟の転入・転棟により自職場でのタイミングで実施出来ないとそのまま未実施になっていた。さらに、予定帝王切開の場合、バースプランとのズレが生じにくくバースレビュー実施の意識が薄いと考えられる。

来年度はバースレビューのマニュアルを作成し、マニュアルに沿って実施できるように啓蒙する。バースレビューを行った事例をスタッフ間で共有し、バースレビューの必要性を再度確認できるようにしていく。今後もDINQLで継続して調査し質改善を行っていく。

## 参考文献

福井トシ子編(2017):新版 助産師業務要覧 第2版. 日本看護協会出版会.